

日産科学振興財団 理科／環境教育助成 成果報告書

回次：第 3 回 助成期間：平成 18 年11月1日～平成 19 年10月31日

テーマ：文化財を用いた環境教育の実践

氏名：遠部 慎 所属：国立歴史民俗博物館

1. 課題の主旨

文化財を用いた環境教育に取り組む地域として、社会的にも豊島問題で有名な豊島において本課題を実施する。豊島を含む土庄町では、週末を中心に、小中学校や公民館で各種の社会教育活動が頻繁に行なわれており、地域のネットワークも確立しており、そのことが豊島問題の早期解決にも繋がっている。しかしながら、文化財を含め、豊島問題を総合的に考える上で、物質文化については社会教育の中で十分には活かされていない。そのことの一因に、発掘などの身近な文化財に触れる機会が少ないことがあげられる。このことは豊島問題を歴史的に位置づけ、地域で語り継いでいく上で、支障となっている。また、土庄町という複数の島からなる行政区分のため、小豆島・豊島・小豊島などの主な島々が分断されているため、それぞれの場所の文化財の比較・検討を行なうのは困難な状況にあった。しかしながら、現在町史の作成も進められており、各島の様相も少しずつ判明してきた。

豊島では、文献資料などがほとんど残っておらず、歴史を構築する上で考古資料は大きな力を発揮する。考古資料は過去を復元する貴重な文化財である反面、先人達の廃棄したゴミという側面を併せもつ。そうした考古資料を通じ、「ゴミとは何か」という問題を草の根レベルで考えるための教育活動を行うことを、本課題では目的とする。近年、ゴミ問題は内外を問わず、各地でおこっている身近な問題である。しかしながら、ゴミに関する問題が生じた地域でゴミを長期的かつ考古学的な視点で検討し、さらに研究成果等を地域に還元している事例はなく、まさにモデルケースとなる。

2. 準備

土庄町教育委員会、豊島学会など地元と調整をはかり、資料保管先である広島県立歴史博物館、瀬戸内海歴史民俗資料館との打ち合わせを行った。また、2007/3/24-26 に遠部・五十嵐聡江・松田朝由が豊島の分布調査を行い、宮地舞子とも意見調整を行った。その際に、豊島学会での展示についても、打ち合わせを行った。豊島の歴史年表をつくる作業を中心としたため、年代測定が講義の核となった。年代測定をわかりやすく伝えるため、東京大学 (MALT) ・国立歴史民俗博物館などの測定機関で打ち合わせを行い、実際の実験等を行った。

3. 指導方法

現地を踏査し、考古学的な情報を積極的に収集し、それらをもとにテキストを作成し、地域の文化財を理解してもらうよう講義を行った。また、実際の資料を借用し、わかりやすい展示を行うことで、地域にある文化財を知ってもらえるようにした。講義はパワーポイントなどを中心に行い、それらの様子については、デジタルビデオで撮影した。また、『News Letter』No.6 や、豊島つぶを、豊島住民会議やフェリー乗り場にて配布した。

4. 実践内容

2007/3/31-4/1 豊島学会

記念講演の形で「豊島の貝塚からみえる瀬戸内海の歴史」を行った。豊島礼田崎貝塚は、現段階でも瀬戸内海最古の貝塚であり、その遺跡の意義づけなどを中心とした講義を行った。それにあわせて、広島県立歴史博物館の資料（神子ヶ浜遺跡）を借用し、わずかの期間であるが、約半世紀振りの豊島に里帰り展示を行った。また、ワークショップで、礼田崎貝塚を巡検し、参加者の一部は踏査を行った。

2007/8/24-8/26 島の学校

豊島の遺跡の分布調査や資料調査を行い、それらの成果を含んだ講義「豊島の先史時代-水ヶ浦を中心に-」を島の学校で行った。ここでは、特に産業廃棄不法投棄場所（水ヶ浦）周辺の遺跡の概要を講義し、跡地利用等を考えるうえで、かつて2万年間の水ヶ浦がどのような景観であったのかを説明した。

また、実際に持ち寄られた遺物については解説を行い、簡易展示（豊島のトランク：市村康作成）も行った。豊島のトランクは、ワークショップ踏査時の様子や成果をコンパクトにまとめた構成になっている。さらに、町民をはじめとする多くの方々との討議で、昔の豊島のどのようなことに関心があるのか、調査を行った。

5. 成果・効果

これまで、「豊島の考古学（古い時代）」はほとんど町民に周知されていなかったが、豊島学会や島の学校を通じ、豊島に数多くの考古遺跡があるということ、町民が知り、実際の遺物を手にとって知ることになった。これまでに、遺跡、遺物に対する認識はほとんどなかったが、これらを契機に、島の学校（最終日）などでは町民から、海中から引き揚げられた飯蛸壺をはじめ、数多くの遺跡情報が寄せられた。

また、実際の遺跡をパワーポイントなどで紹介したことや、RSK（山陽放送）でワークショップの様子が報道されたこともあって、豊島の遺跡が、はじめてメディアや映像の上で、クローズアップされることになった。なかでも、瀬戸内海最古の貝塚、礼田崎貝塚は、特に周知されることになり、『土庄町誌』（2008.3 刊行予定）に掲載されることになった。

本年、豊島を学ぶ「島の学校」において、はじめて立ち上がった「豊島を学ぶ歴史クラス」において、その一翼を担い、次年度以降に引き継げる形になったことで、一定の成果が得られたものとする。

6. 所感

実際の遺物の展示、借用にあたっては所蔵機関の手続き上、スムーズにいかないケースも生じた。そのような中、実際豊島において、誰でも自由に扱える資料（教材）を蓄積していく必要が高いことがわかった。そのためにも、豊島中学校などにある資料を再整理する必要性は高い。

また踏査した際に、遺跡の破壊が進行しているケース（測量のための基準点が遺構内に設置）や、所在が不明になっている石棺なども多く存在し、それらについても対策が必要である。宮地の踏査ではその後、さらなる問題はないようであるが、ひとまず遺跡の周知に努める必要がある。

周知遺跡であることが認識されていないために、このような現状があると考えられ、豊島つぷなどを作成し、周知を促すために配布する意義や必要性は高い。これまで、瀬戸内海島嶼部において、そのような作業は行われていないため、先駆的な試みと判断したい。

7. 今後の課題や発展性について

豊島学会は年度当初、島の学校も夏休みの終わり頃に開催されたため、会場は学校施設や公民館等を使用するもの、小中学生の参加が少なかった。豊島には高校がないので、豊島のことを学べる機会は、小中学校までしかないため、それらを対象とした講義を行う必要がある。

そこで今後は、アースデーや、住民のゴミ拾いの日に、屋外の産廃場所である水ヶ浦の浜辺や、柚浜、中玉、神子ヶ浜などのビーチで、ゴミを片付けつつ、実際に貴重な遺物を収集し、ゴミの中から遺物をみつけるという作業を行うことを考えている。また、中学校などでの遺物の整理を行っているので、一定の成果があがった段階でそれらを使った総合学習授業なども視野に入れている。

さらに、収集した遺物を整理し、新たな島の歴史を語る資料として、心の資料館に展示することや、礼田崎貝塚の簡易展示として好評であった「豊島のトランク（市村康作成）」の続きを作成していくことを考えている。これらは、豊島の考古学的な成果を発表していくうえで、極めて有効な手段となる可能性が高い。

また、本年度の活動の中で、考古学と豊島問題の関連についても、ある程度調査が進んだので、そういった問題についても踏み込んだ情報収集を行っていききたい。

8. 発表論文、投稿記事、メディアなどの掲載記事

論文、発表資料

遠部 慎「貝類の年代測定-ヤマトシジミを中心に-」『News Letter』No.6、pp.4-5、学術創成研究事務局(2006.12)

遠部 慎「淡水域から干潟へ」『International Symposium Restoration and Sustainability of Estuaries and Coastal Lagoons』p.242、汽水域国際シンポジウム 2007 組織委員会(2007.1)

遠部 慎「豊島の貝塚からみえる瀬戸内海の歴史」『豊島学会 第1回研究発表会』pp.1-3、豊島学会(2007.3)

遠部 慎「豊島の先史時代-水ヶ浦を中心に-」『第5回島の学校資料』pp.1-10、島の学校実行委員会(2007.8)

遠部 慎・松本安紀彦・角縁進「豊島縄文時代遺跡群の再評価-神子ヶ浜遺跡の研究報告-」『瀬戸内海研究フォーラム in 香川』p.32、瀬戸内海研究会議(2007.9)

五十嵐聡江・松田朝由・遠部慎「豊島つぶ(遺跡編)の作成にむけて」『瀬戸内海研究フォーラム in 香川』p.33、瀬戸内海研究会議(2007.9)

遠部 慎「礼田崎貝塚」『土庄町誌通史編』pp.6-7、土庄町(2008.3 刊行予定)

新聞記事

2007/4/2 山陽新聞ほかに講演等が掲載。

2007/8/26 四国新聞ほかに授業の様子が掲載。